

# 文化高知

'99年11月 NO.92



「秋色、多宝塔」 澤田 久

〈もくじ〉

経済再生と覚悟	中川 洋	2
京都にありて	杉本泰男	3
個性としての障害と文化の広がり	竹村利道	4~5
『高知の女性』と『アメリカ人女性』	明神千代	6~7
回想……日和崎尊夫君のこと (下)	田中白歩	8~9
「写真文化の村」吾北村	高橋幸十郎	10~11
山はスキーに温泉・キノコ(6)~キノコなくして秋はなし②	大森義彦	12
ミュージカル「光の中で…」に参加して	本間聖康	13
風俗歳時記・風伯		14~15

(財) 高知市文化振興事業団



# 個性としての障害と文化の広がり

竹村利道

## 表現する個性

「障害を持つのに」「障害を乗り越えて」……障害を持つ人が創作した作品に対し、必ずと言っていいほどその評価に付随してきた表現である。

それは悪意なく伝えられ、違和感なく受けとめられてきた。従来、障害を持つ人の創作活動はそのリハビリ訓練の一環として捉えられてきた。「健常者」に近づく、戻る、ためのその指導は、より障害を感じさせないように「上手」に描く、書く、作ることに主眼が置かれた。言うまでもなくその「障害」は忌むべき存在であった。

そんな評価が少しずつ変わり始めている。

「障害を持つ人の作品ってすごいんだよ」。こう言ってくれて私に障害を持つ人の創作の真髄を伝えてくれたのは、さをり織りを中心に様々な文化活動を楽しむ知的障害を持つ子どもたちのグループだった。リハビリを目的としないその作品にはそれとは明らかに違うエネルギーがあった。それは子どもであるエネルギーというより、まさしく障害を持つというパワーであった。そしてそこには矯

正を図るという指導ではなく才能を引き出すという支援があった。

「形式や物事にとらわれない彼らの障害は創作の上でもとても大切な個性だし才能」。そう彼らの先生はこどもなげに言った。「個性」や「才能」というその捉え方で障害をみたことのない私には衝撃だった。しかし衝撃を超える事実がそこにはあった。

セオリーを気にしない知的障害特有の感覚が見事に表れた織物。画用紙

に取まらずはみ出して継ぎ足し継ぎ足して完成した絵画。もしかして障害という特性がなければその表現は異なっていたことだろう。間違いなくそこには障害を持つがゆえのエネルギーがあった。

長く障害を持つ人たちに関わってその人たちのマイナスの部分に目を向けることはあっても、障害を個性



よさこい祭りに初参加した「てんてこ舞」チーム

現もあっていいはず。

「障害があるのに」ではなく「障害があるから」表現できる世界。それは障害のない者には表現できないものだとしたら紛れもなくそれは個性と呼べるのではないだろうか？自らの個性としての障害を表現に生かす中でその障害は「文化」としての役割を担う。

## 涙の意味と感動の正体

この夏、まちを沸かせた障害を持つ人たちのよさこいチーム「てんてこ舞」。裏方として参加して行く先々で出会った涙。その涙の正体は何だったろう。やはり「障害があるのに頑張っている」だったような気

がする。障害を持つ人が何かをする時、そこにある社会の評価にいつもこの感覚がつきまとう。踊るといって芸術表現の中で、様々なチームが自己を表現した。その表現への評価の中で参加チーム中唯一「てんてこ舞」は表現としての評価の前にこの前提があった。

「障害者が頑張っている」という見方だけで涙を見せられて満足しているのは、文化を増幅できない、変えられない。踊りという自己表現の中で、その個性を伝えて感動を生み出さなければ。他チームに比べ躍動はなくても荘厳を、流麗さはなくても鮮烈さを、そのそれぞれの障害という強烈な個性を表現の武器とし、ひとが生きる魂を表現できれば、観る者にこれまでもとは違った感動を呼び起こすことだろう。

障害は誰一人、好んで持つ特性ではない。だから軽減させる治療もするし訓練もする。そして、その努力の中でともすると否定されるばかりの存在であったその障害が、人としてのエネルギーの倉庫だと見た時、その障害は個性へと変容する。

## 標準への呪縛と解放

人の生き方は千差万別であって

いと言いながらも、人は「標準」に支配される。その「標準」の中で「標準」になれなくて、障害を持つ人たちは標準以下としての自己認識に埋没する。

創作活動を通してその障害という障害者しか持ち得ないエネルギーの存在に気付く、その放出を学ぶことで、自分自身を再認識し、誰にも代えられない自分自身の存在価値を見いだす。

「障害があることを感じさせない」。これまでのこの評価を「障害を持つエネルギー」を表現することで障害を持つ人を取り巻く視点も変わってくるのではないか。

障害を持つ人の芸術活動に違った認識が生まれた時、その文化の広がりがまた一つ生まれることだろう。

この夏、障害を持つ子どもたちの作品展「Children Works」を開催し、持っている障害も含め表現する喜びを伝え、反響を得た。そして初の障害者よさこいチームの運営に関わり、障害を持つ人の表現と社会への伝え方について再考した。

とても熱い夏だった。

たけむらとしみち・高知市障害者福祉センターソーシャルワーカー



「もっと作品を発表できる場があれば」という要望の中で今年初めて企画されたパラレルアーツ・ギャラリー Children Works。さをり織り、絵画、書道など子どもたちの作品35点が出品された（高知市はりまや町の市民フロア）

# 『高知の女性』と『アメリカ人女性』

明神千代



十二年半のアメリカ生活に終止符を打ち、郷里高知での久しぶりの生活を始めてすでに二年半が経った。アメリカから帰国する直前には、日本人仲間が「千代さんは、日本では逆カルチャーショックを感じて生活しにくいのでは」と何かと心配してくれた。

現にアメリカの大学院で一緒に学んだ日本人の同級生や先輩の中には、帰国後に職場で「意見を言い過ぎ、生意気なアメリカ帰り」というレッテルを貼られたり、女性に対する不平等扱いに悩まされていた人たちが少なからずいたからである。が、その心配してくれた仲間達に私が報告したことは、「私は、ラッキー。帰国当初から高知での生活で逆カルチャーは、あんまり感じられない。自分の地で楽しくやって行けそう」であった。

「どうしてそれほど逆カルチャーショックを受けず、すんなりと日本の生活に戻れたのか」を自分でもいろいろと分析してみた。その大きな理由としては、高知の女性の性格が、日本の他地域の女性よりもアメリカ人女性の性格に近く、アメリカナイズされた(?) 私でもそれほど抵抗なく入って行ける職場と生活環境がこの高知にすでにあったのではない

かということだ。

「とにかく、高知の女性は明るく活発」「高知の女性はどうしてあんなに強い?」「(強い)とはどういう意味?と聞き返したくなるが)と高知の女性に関する異口同音の感想である。ほとんどが県外出身者である彼らが、いろんな所で高知の女性に触れ、そんな印象を感じては、職場で他の同僚と確かめ合うといったところだ。

正直言って、高知で生まれ育ち、大学時代に東京で何年間か住んでいたとは言え、渡米するまでの生涯の中で高知での生活がほとんどを占める私には、「高知の女性が活発で強い!」などとあえて感じさせられる機会はなかった。が、今回帰国して他県出身者に囲まれた職場で、そんなコメントを言われて初めてそうかなと感じるのである。

確かに高知の女性は、アメリカ人女性に似て「独立心」は人一倍強い気がする。だから、結婚しても何らかの仕事に就いていることが多い。平成七年度の国勢調



米国海軍士官学校教員時代の学生たちと

学校のことで同級生の母親に昼間に連絡しようとしてもまず不可能だという。それは、高知のほとんどの母親が昼間働いているからだそうだ。それだけならまだいいが、その働いている母親の中には、「○○さん、どうして外で仕事しないの?」(アメリカ人の場合は、そこまでずけずけとは聞かないのが普通であるが)とまで尋ねてくる人もいて、家事育児だけに専念している私の同僚の奥さん達は返事に困るとか。

では、アメリカ人女性の雇用状況はどうだろうか? 平成九年の米国家労働局統計によると、六歳未満の子を抱えて仕事をする母親の割合は六五%で、六〜十七歳の子になると七八%の母親が仕事に就いている(しかし、ここで忘れてならないのは、その中の二三%はシングルマザーで、共稼ぎではない)。だからアメリカでは結婚後もまずほとんどの女性が仕事を続けているのは事実で、子供がいなくて無職の既婚女性のことをアメリカ人は一般的に不思議に思うくらいである。「病気で仕事できないのかな?」とまで疑う。その感覚は、高知の母親が仕事をしてない母親に対し不思議に思うのと似ているかも知れない。

では、高知の女性は、職場で男女

平等に扱われているだろうか? 平成九年度統計によると、男性に対す



海軍士官学校の元同僚と。筆者(中央)以外の女性すべてが働く母親たち

る女性の給料比の全国平均は六三%だったのに対し、高知の場合は七%と随分高い。しかし、これは、「高知の女性は働き者といわれ勤続年数も長い」とも指摘されている。

だから、女性管理職比率が昨年、全国一位になったにもかかわらず、パートタイムの安い賃

金(平成八年、全国三十七位)で長年働いている女性が多いことも忘れてはならない事実だろう。参事まで述べてみると、アメリカでの男女賃金格差は七四%(男性に対する女性の給料比)という意外に低い数値が出ている。しかし、同じように働き者である高知の女性達とアメリカの女性達の境遇を比較した場合、根本的違いは何であろう? それは、彼女達の家庭生活環境にある気がする。すなわち、夫との家事分担量の違いであろう。

具体的数値はわからない(というより、アメリカ夫婦の家事分担量の統計等はさがしても見つからなかった)が、私の十二年半のアメリカ生活体験からも日米の差が窺える。向こうの夫婦は、家事育児には共に

査資料によると、全国の共働き率平均が四七%に比べて、高知県は五三%という数値が出ている。また、三十三〜三十四歳の女性労働力率は六七%で全国平均より一四%も高く、山形県に次いで全国第二位であり、育児期も働き続ける女性が多いことを物語っている。

特に、六歳未満の子のいる核家族で共働き世帯構成比に関しては、全国平均は二一%だが、高知県の場合は三八%と高くなっている。だから、他県出身の同僚の奥さん達が子供の

参画するのが普通で、夫にしてもその責任は妻と同じ程あるのは、自覚している。だから、私の友達のアメリカ人夫婦のほとんどが、交代で家事育児を行う。子供も「お母さんは、今日は、図書館で勉強」とか、「お母さんは今日は仕事で遅くなる」と言っただけで納得し、お父さんの手料理を食べるし、夫も「妻は今、ビジネススクールで勉強しているから」とか「妻は今日会議で遅くなる」と言っただけで、当然のごとく子供の世話一切をする。また、育児のない夫婦にしても家事のほとんどを分担して行っているのが普通である。だから、最近の日本人夫婦像も幾分変わってきたとはいえ、今だに乳幼児を抱えて働く母親の負担が父親に比べて極端に多いという日本の状況等は、アメリカ人夫婦には、全く信じ難い事実かも知れない。

最後に、高知の男性諸君、「高知の労働力人口の四五%を女性が占める(全国一位)」「高知の女性は働き者」「高知の女性は大切な労働力」「高知県の離婚率は全国四位」という実態を再認識して、どうか、この際、奥さんの家事育児をもっと手伝ってあげて下さい! (みょうじんちよ・高知工科大学) 助教授

# 回想……日和崎尊夫君のこと(下)

田中白歩

## 『白椿荘』

彼が高知へ帰ってだいぶ経った頃、「今度横浪へ土地を買って家を建てるので、その時は先生に看板を書いてもらいます。名前を『白椿荘』とつける。その時はぜひ来て泊まってもらいたい」とのこと。

僕は、まさかあの景勝地横浪に家を建てることのできるだろうかと半信半疑であった。その後暫く経って、家を建てたから泊まりがけで来てもらいたい、という電話を再三もらっていた。

白椿荘の看板も「今度持つて行くから書いてくださいよ」とは言っていたが、今となつては白椿荘へ泊まりに行かなかつたことはともかく、あんなに熱心に言っていた約束を果たさずに済んでしまったことが悔や

まれる。

長年教師をして結婚式に呼ばれることはあつても「家を建てたから泊まりに来てくれ」と言われたという話はそんなに聞かない。日和崎は心からそう言ってくれていた。

白椿荘の約束を果たさなかつたことは、僕には終生の悔いとして残つた。死者に借りを作るべきでない、生者は生きている間悔いが残ることになる。

木口木版の材料は椿の木が一番よいのである。彼は椿の木をさがして、僕にも気をつけてくれと頼んでいて、僕にも気をつけてくれと頼んで行つてもらつて来たようである。後日作品一葉をお札に渡してくれと僕のところに届けに来た。そんな義理堅さのある彼である。

ある時、近所の大工さんが移植した百年ものの椿を枯らしたので連絡

野さんとも酒杯を交わすのは初めてであるがすぐに打ちとけて楽しい会で終わったのは十時を過ぎた頃であつただろうか。それからさらに調子

の出た二人は、もう灯の消えかかつた街をはしごして廻つた。

知らぬ町の灯の消えた夜である。終わりに、「この店はいんま来た

してやつたら、早速女の人のトラックに便乗してやつて来た。

「これが僕の家内です」と丸顔で健康そうな人を紹介された。彼女はU町で魚屋をやっているとのこと、二人は大きな椿を積み込んで帰つて行つた。

「東京へ残してきたと聞いている妻君はどうなっているだろう」と思ひながら、遠ざかつて行く二人を見送つた。

## 西南美術展

年号が昭和から平成に移つて間もない頃、西南美術展主催の方から書道の審査を依頼された。洋画は日和崎尊夫と知らされて、当日駅へ行くと彼は妙齢の女性と一緒に、彼を見送りに来ているところであつた。

「僕の家内です」  
「……………」

店ぢや」と同じ店へ入つて行く始末。灯も消えて店も閉じてしまつて「これから中村へ行こう」となるが、これにはさすがに僕も弱つて、なおもタクシーで行こうとはやる彼をようやくなだめてこの夜はこれで打ち切りとなる。

酒とは縁の切れなかつた彼である。教師と生徒の遠慮もあつて、このように最初から対で飲むようなことがなかつただけに、今となつてはこのように痛飲の時を持たたことを懐かしくよかつたと思つている。

翌日は、城西中の同窓で結婚して幡多へ嫁入つて来ている小串さん(旧姓)の運転で宇和島の南楽園へ行くことを決めていた。昨夜の二日酔いで少し重い頭も、南予の明るい景色に迎えられて南楽園に着く頃にはすっかり爽やかな気分に含まれていた。

尊夫は昨日から何回も言っている言葉を今日も口にした。

「先生と一緒にこんな日があるうとは考えもしなかつた」と。それは私と同様である。

六月の菖蒲は盛りを過ぎて、広い園内には人影もまばらである。美しい池の周りを三人はゆっくり歩きながら二十数年ぶりの小串さんの近況を聞き、私たちは満ち足りた平和な

今度はいつかのトラックの彼女とは違うので怪げんな顔でいると、彼は一瞬、あのはにかみながら意地悪をした時に見せる笑みをチラと見せた。アッ!この笑みは無断欠席の折家庭訪問で見たあの笑みだ。室内から出て来た時に見せたあの笑みだ。たばこ事件の時に見せたいたずらっぽいあの笑みでもある。私はそこに少年時代の尊夫を見たと思つた。

東京でも高知でも酒が入ると前後の見境がなくなり、随分迷惑をかけた恐れられもしたらしいが、僕はそういう嫌な目に遭つたことは一度もない。夜中に「私の知っている酒友と飲んでいよう」と言つて電話がかつて来る時も、ロレツの廻らなくなつた口調を一生懸命素面のようになっているのが電話のこちら側にも伝わつて来ておかしかつた。

尊夫はあんなに見えても私に対しては中学時代の心を持ち続けていたのではあるまいか。

西南美術展の審査会場は大月町役場であつた。審査が終わつて、日和崎の外に日本画の上田明男さん、小野保さん、陶芸の西郷滋さん等と宿毛へ出て慰労会を始めた。明日早いからといって西郷さんはすぐ帰つたが、日和崎とはこのように酒席を持つのは初めてである。上田さん、小

想いにひたつていた。

そして南楽園のこの風光は永久に脳裏に刻みつけておこうと園を後にした。

## 日曜美術館

N町の彼の奥さんという方からハガキをいただいた。

「今度NHK日曜美術館で(H10・9・6)日和崎の作品を取り上げていただけることになったのでご覧ください」というのである。

NHKのこの報道は彼の人柄とその作品もよく描けていて仲々感銘深かつた。特に私には、太平洋の見える白椿荘の内部の様子や、今は亡き主が使つたのみや大小の道具、また仕事場の写真は初めて見るだけに、彼が度々呼んでくれていた場所がこんなだと特別の想いにこみあげてくるものがあつた。

N町の奥さんという方にはお礼のハガキを出したが尊夫から紹介された二人の奥さんのの方が知らせて下さり、どの方に届いたか分からない。私のことをだいたい知っている文面であつたが、尊夫もトクな男である。

(たなかはくほ・墨線美術協会同人)



日和崎尊夫氏をしのぶ集い「白椿祭」。彼のアトリエ白椿荘にちなんで名付けられたもので、版画家、画家、詩人、美術愛好家らが集う(高知市横内の星ヶ岡アートヴィレッジ)

# 「写真文化の村」吾北村

高橋 幸十郎

吾北村には、清らかな水、程野の滝、日本一のヤブツバキなど、豊かな自然と、その中で営々と受け継がれてきた人々の暮らしがあります。

しかし、昭和五十年、五十一年の台風災害で、なつかしいふるさとの姿は、私たちの遠い記憶のものとなりました。

吾北村合併四十周年にあたり、村民一人ひとりがふるさとを見つめ直し、移り行く時代の中で、ありのままの吾北の姿を写真で残す、その出発の年にしたと思います。「吾北はええくぜよ」と感じながら「記録の財産」を村民全員参加で作ります。

ここに世界でただ一つの『写真文化の村』の誕生を宣言します。  
(宣言文より)

日、吾北村合併四十周年を記念するその日誕生しました。

吾北村は、高知市より北西三十八キロの所、国道一九四号が縦断、四三九号が横断、集落は仁淀川の支流に開け、四国山脈の懐に抱かれた山村です。

昭和三十一年、清水村、上八川村、小川村、下八川村が合併、吾北村として発足しました。

そして、四十有余年、合併時には一万余を数えた人口も、若者の流出や自然減、少子化現象により、過疎と高齢化が進んでいます。

しかし、吾北にはありのままのすばらしい自然が残されています。柿葎のヤブツバキや樺ノ木山の大山杉、程野の滝や仁淀川支流の源などの、樹と水。

村民は、この自然と和し、自然と

ともに暮らしを営み、生活文化を継承し、歴史を刻んできました。

これらの自然や文化は、人々の生活や村づくりを進めるうえで貴重な財産として受け継ぎ、次代へ伝えなければなりません。

この佇まいは、平成八年に劇場公開された映画「絵の中のぼくの村」の舞台となり、村民がエキストラなどで参加することによって、自分の村をみつめ直し、映像に対する関心が生まれ、村に映像文化の芽を作りました。

「写真文化の村」の発案者山中賢一さんは、新聞社の元カメラマン。

平成五年に県外から吾北村に移り住み写真店を経営する傍ら、写真教室や学校等での講師として、また、村内を回って写真の楽しさを教えてきました。

「移り行く自然や、人々、日々の営みを写真にして後世に残そう。村の記録としてすばらしい財産になる」

「レンズをとおして吾北を見直し、写真に撮ることによって、吾北の自然や風土、暮らしを再発見し、村の良さを再認識することは、村を愛する心を育て、活力ある村づくりにきつと役立つはず」

吾北村を「写真文化の」村に。山中さんの熱い想いが始まりでした。

過疎の村に写真を通じて共通の話が生まれ、カメラを通じて交流が深まりました。

老いも、若いも、村民全員参加の

記録の財産作りは、今しつかりと歩き始めました。

去年春、新京橋プラザで開催した写真展には大勢の方の参加を頂き、「まるで吾北村が高知市に出張してきた紹介してくれたかのように感じた。村をみつめ、村を愛する心、これこそ健全で活気ある村づくりにつながるのではないだろうか」

「村人の村人による写真展」現代人がどこかに忘れてきた何かが、画面の向こうに見えるのでは」

そんな温かい励ましを頂きました。村では、三十台のカメラを用意し、学校や、村民に貸し出しています。また、山中さんに推進アドバイザーを、村民十八人に推進ボランティアを委嘱し、事業への全員参加を呼びかけています。

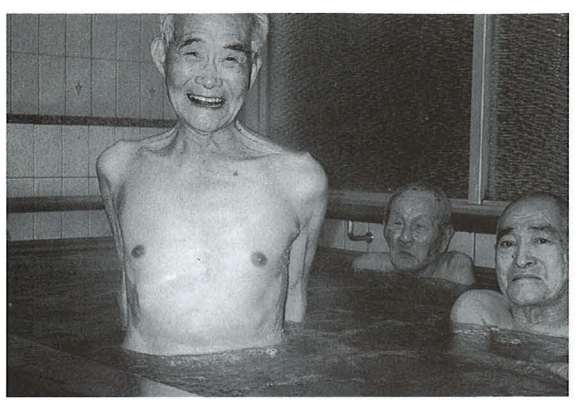
平成八年に始まった記録の財産作りも四千二百余枚になりました。

中央公民館の、村民写真展一九九八の会場には、自然が、人々が、日々の営みが、千二百三十五枚の記録となって息づいています。国道一九四号と四三九号の交わる所、水と緑の「写真文化の村」は、そこに。

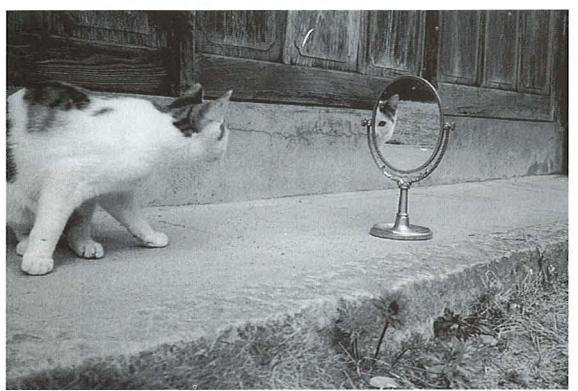
たかはしこうじゅうろう・吾北  
村中央公民館長



吾北村民写真展の入賞作品の数々。吾北村の豊かな自然、和やかな人々、行事、動物等が力強く表現されている



「いい湯だな」(1997年最優秀賞)



「ミーちゃんを見た」(1998年最優秀賞)



## 市民フロア

個展・グループ展・会議に最適！

●広さ・内装 約96㎡・壁面布クロス張り  
スポットライト完備

●使用料

展示	1日(9時~18時)	11,000円
	1週間	70,000円
会議	9時~12時	4,000円
	13時~17時	5,000円
	17時~21時	5,000円

※休館日 毎週水曜日(搬入・搬出日)  
年末年始

- ※表示価格はすべて本体価格です。
- 中西安男著 **やっさんのわくわく動物記** A5判・一九二頁 一、八〇〇円
  - 坂本正夫著 **土佐の習俗・婚姻と子育て** 四六判・二〇〇頁 一、四〇〇円
  - 山岡 浩著 **高知の農業** A5判・二四八頁 一、八〇〇円
  - 外崎光広著 **植木枝盛の生涯** 四六判・二六〇頁 一、九〇〇円
  - 高知市文化振興事業団編 **高知のエスプリ** A5判・二六〇頁 一、一六五円
  - 山本 大著 **幕末の青春―坂本龍馬の生涯** 四六判・二六八頁 一、一六五円
  - 依光 裕編著 **珍聞土佐物語 上下巻** 四六判・三九二頁 各一、五五三円
  - 外崎光広著 **土佐自由民権運動史** A5判・四二四頁 二、七一九円
  - 外崎光広編 **土佐自由民権資料集** A5判・三四四頁 三、〇〇〇円
  - 岡林清水著 **高知県文学散歩** 四六判・二七八頁 一、七四八円
  - 高知の文化を考える会編 **高知の文化を考える** A5判・一八八頁 一、一六五円
  - 高知市文化振興事業団編 **わがまち百景** A5変・二二四頁 一、一六五円
  - 筒井広道著 **画帳の歳月** A5変・二五六頁 一、九四二円
  - 高木啓夫著 **土佐の芸能** B5変・三四六頁 四、八〇〇円



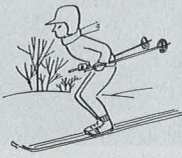
山はスキーに温泉・キノコ (6)

# キノコなくして秋はなし

②

鈴なりマイタケ

大森義彦



つており、上部すなわち根っここの部分はオーバーハンクになっていて、ちよつと登れそうにない。そしてそのオーバーハンク部分も含めて、一面にマイタケが鈴なりだったのだ。

ケ畑である。根元のオーバーハンク部分は上からも下からも届かず、それ以外は採り尽くしてバナナ箱十箱ほどになった。あちこち配ったが、十日近くはマイタケ三味だった。

まだ半分残っているというし、この光景はぜひとも見ておかなければならない。それで翌日真つ暗なうちから、ザイルと脚立を持って出発。林道から歩いて十分とかからないところにそれはあった。

そもそも杉植林の中に生えるなんておよそ常識を逸しているし、あの生え方は不思議というより異常である。普通は根の回りに数株生える程度なのだ。それはともかく、これでマイタケには一生不自由しないぞとほくそえんだものだった。

その翌年、胸をワクワクさせながら現地を訪れた。まず二株採れた。まだ早すぎたかと思つて数日後また行つてみたが、一つもない。また数日後に出かけるもやはりない。結局年に何回か、片道三時間余りもかけて五年間毎年通つたが、以後まったく生えることはなかった。件の木は触るとポロポロ崩れるほどの古い切り株で、もしかしてあの年は最後の死に花だったのかもしれない。

こうして「落合峠のマイタケ」は劇的に現れて劇的に姿を消し、高知のキノコファンに衝撃を与えた。思うに、この大発見が高知におけるキノコ熱を盛り上げる一つのきっかけになったのは、多分間違いないだろう。



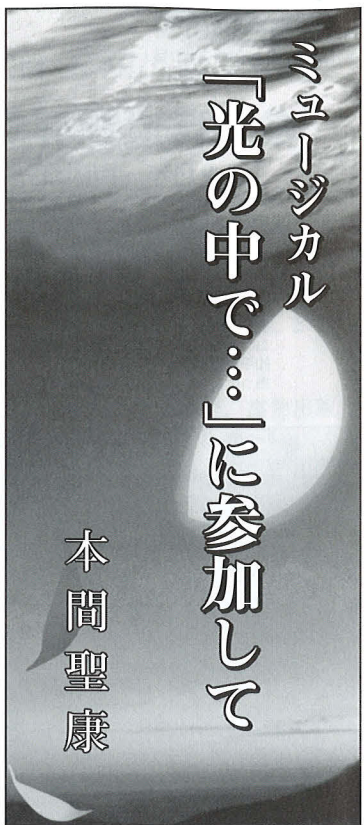
キノコファンに衝撃を与えた落合峠のマイタケ

上半分にはまだびっしりマイタケ。脚立を使って片っ端から採りまくる。平らに伸びた根っこの上は六畳ほどのスペースがあつて、まるでマイタケ

（おもしろよしひこ・高知大学）  
（教育学部教授）

マイタケは舞茸と書く。見つけるのと躍り上がって喜ぶということからこの名が付いたそうだ。また、そのありかとはたとえ親兄弟といえども教えなれないと言われるほどだということからも、その貴重さは見当がつこう。大分前の秋、そろそろマイタケ探しに行こうと思つていた矢先、山仲間が大量のマイタケを持ち帰った。それはまったく偶然の発見であつた。一行十人は車で徳島県三加茂町から落合峠を目指した。元々悪路なのだが、少し前の台風でさらに荒れていてとても車が上りたないので、途中から昔の登山道に入った。だが全員初めてのコースで、すぐに分岐点があつてどちらが正しい道なのかわからない。で、一方の道を進んだが、どうも様子がおかしいというので二名が偵察に行き、他の者はその場で待機することになった。そして残った人たちがふと脇を見やると、杉の

植林帯の中に巨大な木の株が逆さまに突っ立っており、その幹の周囲に無数の大きなキノコが群がっている。あんなのはきつと毒キノコに違いないと、棒でついたりして見るところへ偵察隊が戻り、たまたまその二人が、実物のマイタケを見たことはないが写真で見つており、駆けつけて、「イヤー、マイタケや!!」と狂喜して叫ぶ。他の者は二人から幻のキノコ・マイタケだと教えられ、けれどまだそのすごさがよく分からないまま、とにかく手が届く範囲のものは一応採り尽くしたという。その量はといえば、大きなゴミ袋いっぱい詰めたのを十人が両手で持ち帰ったのだから、半端ではない。それでもまだ全体の半分ぐらいだという。すつかり木肌がはげ落ちてしまつてなんの木か分からないが、直径は二尺以上、高さが四、五尺あつて、それが斜め逆さまにひっくり返



本間聖康

過去の市民ミュージカルへの参加にも興味・関心がなかったわけでは

なかったが、今回は、模擬ミュージカルのレッスン体験日の日程に特に

支障がなかった。この一年のことも考えずに申し込んだ。自分自身では、年の割には体力やリズム感などはひどいとは思つていなかった。しかし、演技に関しては恥ずかしさもあり、自信はほとんどなかった。ただ、体験することによって何か新しい発見があるかもしれないとの期待はあつ

ミズノのフジ文  
「光の中で...」感動  
ミュージカル (県民レ  
ンタル・ホール・オ  
レ)  
観客を魅了した  
ユで...ナール・ホ  
ル・オレ  
化ホジ

た。模擬レッスンを体験する中で、オーディションの課題が提示されると、次はその課題に挑戦し、ミュージカルにチャレンジしてみようと思つた。結果、無事オーディションに合格し練習が始まると、本番での配役は二十歳ほど年齢の高いチョットおとほけの村人役であつた。

色々と考えていたことか。何はともあれ、唄に踊りに演技にと多くの時間をかけて練習し、私も皆もとても上達した。特に踊りは、若者の上達は著しく、激しさや切れの良さが要求される踊りに関しては、若さの勝利であつた。

本番が間近になり、作品が完成度を増すにしたがつて団員たちの演技に対する思い入れは高まり、さらに完成度を高めようと積極的な練習が繰り返された。この頃からは、通し稽古が終わると目に涙する者も見られはじめた。私自身はまだ割と冷静だったように思う。

さて、本番当日のリハーサルでは、まだ盛り上がり欠けていた。しかし、いざ公演となると皆のパワーは全開となり、今までで一番の出来映えであつた。二回目、三回目の公演も皆力を出し切つて頑張つた。この頑張りで、これまで冷静であつた私も、本番での気持ちの入つたセリフを聴いたとき、思わず感激して胸にジンと来るものがあり目頭が熱くなつた。本番ならではの気迫のこもつた迫真の演技だった。きつとこの感動が、私を含め仲間や観客を次の舞台へと引き込むことだろう。

（ほんまきよやす・高知大学教育）  
（学部教授）



### 散歩の途中で

中須賀の裏通りの四つ辻。たばこ屋の軒先と電信柱の間に小さなポストが立っている。狭い道路を幅いっぱいに通る車や、行き交う通勤通学の自転車に追いやられたかのように、なんとも肩身が狭そうだ。とはいえこのポスト、正式に設置されている正真正銘のポストで、立派につとめを果たしている。ちょっと頼りなさげにも見えるが、どうぞ安心してご投函を。

## 風 俗

### 朝倉夜間中学

県唯一の自主夜間中である朝倉夜間中も紹介されている。(9月12日付高知新聞)

同校は、昨年4月に、高知市朝倉第一小の校務員棟を教室として開校。

本年9月現在、生徒数は10名。生徒は、重度障害者、高校や女子短大を

中退した40代の主婦、整備士を目指す男性、小・中・高以来の不登校者などさまざまである。講師陣は、昼間働いている人々や、高知大生などのボランティア。授業料はなし。昨年度は、支援者からの寄付金がおもな運営費であったが、本年4月からは、市からの支援も受けられるようになった。

昨年11月、同校運営協議会設立総会に招かれて、記念講演を行った、松崎運之助氏(山田洋次監督「学校」の熱血教師のモデル)は、

「民間中学で、毎週月～金・5日間授業を行っているところはほかにない。高知の在り方は、夜間中学関係者の注目のまどであり、もっとも応援したい学校である。」と、熱いエールを送っている。(念)

## 第10回 高知出版学術賞 推薦募集

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

### 【対象】

次の事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。  
①高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。  
②1999年中(奥付の日付による)に発行された単行本。

### 【推薦】

自薦・他薦を問いません。必要事項を記入した所定の推薦書に、該当図書2部を添え、審査委員会まで提出して下さい(図書は返却しない)。なお、推薦書は請求下さればお送りします。

### 【受付期間】

平成11年12月10日(金)～平成12年1月31日(月)

### 【表彰】

3点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金10万円を贈ります。

### 【推薦・お問い合わせ】

文化振興事業団内 高知出版学術賞審査委員会

## 今号の表紙

### 「秋色、多宝塔」 澤田 久

一昨年の秋、岡山、広島県境の紅葉谷へ出かけた時に、たまたま見付けた多宝塔を描いたものです。小春日和のほのぼのとした感じが出るように工夫したつもりです。

絵を描き始めたのは退職してからですが、友人には「目に見えるものだけでなく、その裏側も描かなければ絵にはならないよ」と言われます。いまだに分かりません。(さわだ ひさ)

## 高知を撮る

第15回写真コンテスト入賞作品

### 田村遺跡群

(平成10年 南国市)

#### 森田清一

田村遺跡群は弥生時代の四国を代表する大きな集落の跡地であり、発掘された自然流路の中に、おびただしい土器の破片が出土している。高知平野は弥生時代の文化の中心地であったと思う。貴重な遺跡である。



## 千年紀

### 風俗歳時記



間もなく千年紀末である。この大晦日の深夜、私たちは、1999年から2000へ、四つの数字がすべて変わるという、まさに千年に一度の歴史的な瞬間に遭遇する。これを「千載(歳)一遇」の機会という。  
二千年前、「日本国」はようやく誕生前夜を迎えつつあった。弥生中期の農耕社会で、人々はどのような暮らしをしていたのであろうか?  
その頃、ポンペイでは、都市計画で道路や水道が造られ、裁判所も、パン屋さんも、遊廓も、中庭にプールをもつ豪邸もあった。  
千年前、我が国の貴族社会では、「源氏物語」の花が開いていた。ヨーロッパは中世、まだルネサンスの光は見えていなかった。  
さらに千年たち、我が国は見事に「先進国」の仲間入りを果たした。しかし、この「発展」の陰に地球はすっかり変貌した。  
二千年前、大地の大半は緑に覆われていた。千年前、まだアメリカも「未発見」で、地球は依然として緑の惑星だった。

大地を覆っていた原生林が開墾され、平地から森や林がなくなり、渚が消え、多くの美しい生き物たちが死に追いやられたのも、すべて最後の千年紀の間である。生産第一、効率第一の「開発」は、生物界だけでなく、春夏秋冬の営みや気象にまで影響を与え始めた。昨今、各地で見られる水害も、遊水地まで開発したことに由来する。まさに人類の自業自得としかいいようがない。  
次の千年紀は、人類が「勢い余って」壊しすぎた地球を少しでも再生させ、いわば「自然のルネサンス」の千年紀にしたいものである。まずは、人口問題の解決であろう。「少ないこと」ほど自然に優しいことはない。そして、科学や技術や経済力を総動員し、たとえ千年かかることがあっても、かつての森や、農業や洗剤の流れこまない川や、生き物がうようよしている磯を再生させる努力をすべきであろう。このような事業をこそ、次の千年紀の「公共事業」と呼ぶべきであろう。

(路)



## 第22回 市民フロア企画展

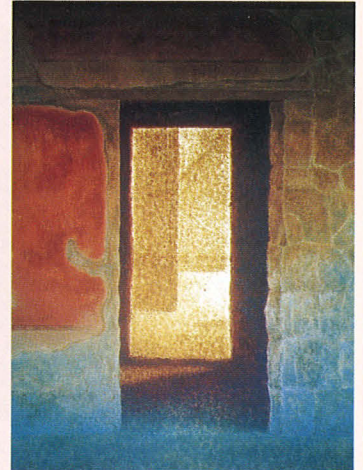
## 市川雅彦日本画展

1999/11/26 (金)～12/5 (日)

10:00AM～6:00PM 会期中無休

市民フロア (はりまや橋・デンテッターミナルビル5階)

中土佐町在住の中堅日本画家市川雅彦さんの個展。県内外で個展やグループ展を重ねる実力派。今回は人物・風景等20～150号の作品約17点を展示します。静かな日本画の空間をお楽しみください。



時の入口 (80.3×60.6cm)

## 第16回 高知市都市美デザイン賞 推薦募集

事業団では、街に個性と調和をもたらしている優れた建造物を広く知ってもらい、より美しいまちづくりを進めるよう「高知市都市美デザイン賞」を選出しています。

身のまわりで、街の美観や景観づくりに貢献している建物・公園・モニュメントなどを推薦してください。

【対象】高知市内にあって平成11年1月1日から平成11年12月31日までに完工した建築物・建造物

【推薦締切】平成12年1月31日(月)  
(郵送の場合当日の消印有効)

## 【推薦】

どなたでも推薦できます。はがきに次の事項を記入のうえ、推薦してください。一人でも何件でも推薦できますが、はがき1通に1件とします。

- ① 建築物・建造物の名称・所在地・完成時期
- ② 推薦の理由
- ③ 推薦者の住所・氏名・年齢・職業・電話番号

## 【送り先・お問い合わせ】

高知市文化振興事業団「都市美デザイン賞」係

## 第16回 写真コンテスト・高知を撮る 作品募集

【テーマ】高知を撮る

\*高知に関する写真であれば撮影対象は問いません。

## 【応募】

\*どなたでも、一人何点でも応募できます。

\*254mm×365mm(ワイド四ツ切)以上の作品で、発泡スチロールパネル貼りとします。

\*組写真は3枚までで、組写真であることを明記してください。

\*その他詳しい要項は事業団までお問い合わせください。

【応募締切】平成12年1月31日(月)

【賞】 特選 2点(賞状と賞金5万円、副賞)

準特選 15点(賞状と賞金1万円、副賞)

入選 70点以内

## 【作品展】

平成12年3月市民フロアにて開催予定

## 【応募先】

\*財高知市文化振興事業団

\*高知県カメラ商組合加盟店または、フジカラープリント取扱店